

ンゼルス在住の4世女性(20代)は2000年以後の日系人のアイデンティティについて次のように語る。

たとえば[元連邦下院議員、現在は運輸長官]ノーマン・ミネタを、同じ日系人であるからという理由で尊敬する必要は、今の日系人にはないと思います。もちろん彼を、彼の考えや実績から尊敬する人は多いと思いますが。理想的に言えば、ある候補について、彼がハンサムだからとか、背が高いからといった理由で投票することがないのが、真の民主主義です。そういう意味では、エスニシティに基づかずに投票がなされることは理想的です。重要なのは、アメリカ人として民主主義を追求することですから。

日系人としてのエスニックアイデンティティの低下に伴い、日系人の集団としての重要性も変化する中で、より世代を経た日系人たちはエスニシティに拘束されない行動を選び取っているというのが、彼女の観察である。その際に生じる問題については一個のアメリカ人としての解決を望み、問題の理解と解決のプロセスで日系人の歴史的経験が役立つ場合に、それが提示されることになる。それは日系人という集団が、もはやアメリカ社会の主流からの認知を要求するだけの存在ではなく、むしろそのアメリカ社会をより民主化していく主体の一部になっているということである。

一方でこれを、「カラークライム」社会によるエスニックな問題の隠蔽をマイノリティ自らが助長させている傾向であると捉える議論もある⁽³²⁾。実際、JACLの活動とは関係していないホノルルの4世女性(20代)は現在の一般的な日系人が人種差別に対してもつ意識について、次のように認識している。

現在のハワイの日系人の多くは、もちろん収容所で何が起こったのかは知っていると思いますが、人種差別がそれほど問題だとは考えていないように思います。彼ら[アラブ人]に何が起きているのかを分かっている、人びとはあえて活動はしない。JACLの活動は僅かな人びとによって為されていて、一方ハワイのコミュニティはとても広がりすぎているので、強い力は持っていないように思います。ごく僅かな人びとがとても強く活動しているだけ。それはアメリカがあまりに個人主義的だからです。

「文化戦争」の時代以降、エスニシティを基盤とした集団の活動を批判するキャンペーンがもっぱら共和党寄りの人びとによって行われたのだとしても、そのメッセージを受け入れる土壌を当のマイノリティの側が形成していることも、ここからは理解できるのである。「アメリカ」が指し示すものが豊かになり、またマイノリティがそれをさらに豊かにする活動の主体となっていることは、まさしく多文化主義の成果である。ただしその「アメリカ」が思考の枠組みとして作用することで、彼らが「日系」という要素を辿ることによって到達できるかも知れない諸問題は見え難くなり、「かくも多様な『アメリカ』」への安住が可能となるのである。

たとえば現在アメリカには、1970年代以降の旅行・留学ブームの中で日本からアメリカに移住するようになった「新1世」やその子供たちである「新2世」の日本人/日系人がいる。またヴェトナム戦争や湾岸戦争を機にアメリカに移住した新来外国人がいる。しかし彼らが直面している諸々の問題を、いまや「アメリカの多様性」を促進する主体となったマイノリティ集団の中にいるアメリカ人たちが共有できる機会は少ない。2004年夏のJACLホノルル大会でも、新1世・2世の日本人/日系人やアジア・太平洋出身者との連帯を強めることは組織の規模を維持するためにも必要だとの声がフロアからたびたび上がったが、「大会の議題の焦点は、ヘイトクライム、愛国者法、アフターマティブアクション、ネイティブハワイアン、多文化の問題といった、公民権問題に関するものに向けられる」⁽³³⁾のがもっぱらであった。ナショナリティを基礎に据えた思考から導かれるのは、かつて第二次大戦中にアメリカ社会のメインストリームから日系人に向けられたのと同じ視線であり、それを以て「『歴史の革新的語りを可能にするアメリカ』を称揚する国家主義的語り」の採用に至るのは極めて容易である。

5. 多文化教育の成果と課題

いまここで、多文化主義が導いてきた歴史教育の基調の推移を図示すると、以下ようになる。まず1960年代以降、国民を構成する人びとの背景に関する論点①において、国民社会が多元的なエスニーによって構成されていることが浸透した。そしてそのエスニー間の関係性についての論点②において、特定の中心的エスニーがその他の周辺的エスニーに対して優越性をもつことを前提とする文化多元主義ではなく、より水平的な関係を志向する多文化主義が力を得ることになっ